

●わたしの戦争体験 あの空を 忘れない

埼玉県地域婦人会連合会／編



あの空を忘れない

定価 950円

1984年5月30日 第1版第1刷発行

1984年8月30日 第1版第3刷発行

編者 埼玉県地域婦人会連合会

発行者 川上 徹

発行所 株式会社

東京都千代田区西神田2-7-6

電話 03(261)3149

振替 東京 8-60777

印刷・製本 ケイエムエス

●わたしの戦争体験

あの空を忘れない

埼玉県地域婦人会連合会／編



発刊にあたって

埼玉県地域婦人会連合会会長 大友 よふ

一九七五（昭和五十）年に「平等・発展・平和」の三行動目標を決めた国際婦人年世界会議がメキシコシティで開催されました。これは、私も婦人にとっては歴史的なできごとでありました。この結果、婦人はいっそう男性と平等の立場で社会に参加し、社会に貢献することを期待されることになりました。

わが国では、その第一歩として、十年がかりでようやく「国籍法」が男女両系主義から男女平等主義に改正されました、不十分ながらも婦人の年金権も保障されることになりました。また、「男女差別撤廃条約」の批准を間近に控えて、「男女雇用平等法」が一日も早く実現するよう期待してやみません。

私たち婦人は、今後さらに真の男女平等が実現するよう力を尽くさなければなりません。それとともに、現在の国際情勢や政治の動向を眺めながら、どんな理由があろうとも人災である戦争を防止し、悪魔の兵器である核兵器を廃絶し、軍縮をすすめることによって浮いた費用で、飢えで死んでいく国々の人々を救うことが求められていると思います。とりわけ、世界最初の「被爆国」の国民として人類の存亡にかかわる核兵器の脅威と、原爆がもたらす後遺症の恐怖を、世界の人々に正しく知らせることが私どもの使命だと考えております。私も日本人は、どこの国にも原爆被爆の悲劇を繰り返させてはならないという義務と責任をもっていると痛感しています。

このような観点から、私も埼玉県婦連も、「どんなことがあっても二度と戦争はしない」と固く誓い合い、民主的で平和的であり、かつ国際的な日本国憲法を世界に冠たる平和憲法として守ってまいりました。核兵器に反対する

運動も進めてまいりました。しかし、最近の国の内外情勢は実に厳しく、不安の上もあります。世界的に見ても軍拡は進む一方ですし、核兵器の開発もとどまるところを知りません。「われありと思ういのちの残り火を核廃絶に燃え尽くすべき」というのが、私の反核運動への決意ともなった次第です。

そこで、二度と再び戦争を引きおこさないために、私も婦人の戦争体験を明らかにし、それを戦争を知らない若い世代に伝えてゆくことの必要を痛感しております。埼玉県内に居住する婦人に「戦時下の体験を語りましょう」と呼びかけたところ、五十九年二月末までに男性を含む五十九人から原稿が寄せられました。どれもこれも充実した内容のもので、一篇として捨てがたく、結局、すべての原稿を本書に収録することにいたしました。それぞれの立場であの大戦下に直接、間接に体験されたことや記憶の底を掘り起こして頂いたこの集積は「手づくりの女の歴史」として、後に続く母たちに感銘と示唆を与えるものと思い、執筆された方々に感謝いたします。

なお、次の諸先生方が編集への協力を快くお引き受け下さって、一人ひとりの原稿をごらん下さいました。このご労苦に対し県婦連を代表して心より御礼を申し上げます。

金子 兜太（俳人）

寺沢 一（東京大学教授）

藤堂 明保（日中学院院長）

縫田 曄子（前国立婦人教育会館館長）

昭和五十九年五月

平和への決意を新たに

—— 発刊に寄せて ——

埼玉県知事 畑 和

三十九年前の今ごろは、毎日のように、日本のどこかに空襲があり、ほんの一瞬の差が人々の生と死を分け、あるいはその後の運命を大きく変えてしまうような惨事がくりかえされていた。東京が焼け、大阪が焼け、多くの都市が何らかの無差別爆撃を受けた。

本県の熊谷空襲の場合は、敗戦前夜のことであり、市街地の八割近くが焼け、死者二四六名、罹災者三千余人と記録されています。その悪夢の十二時間後に「終戦」を知らされた市民の心情は、察するにあまりあります。

この頃、戦地はむろんのこと、銃後といわれていた国内で、あるいは国外からの引き揚げの中で、多くの一般市民が死亡し、あるいは負傷しました。戦争のもつ本質的な悲惨さは、こうした多くの一般市民の犠牲にあるといえます。

戦争は、言うまでもなく、愚かな行為であり、人々が営々として築きあげてきたものごとく破壊し、死の惨状をもたらすだけのものであります。その反省の上に立つて、わが国は、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意」すると新憲法に定め、戦争を放棄し、戦力の不保持を誓い、平和国家としての高い理想をかかげて、国際社会の平和のために努力することとしたのであります。

しかしながら、戦争を知らない世代が、国民の三分の二に近づいた今日、こうした戦争の悲惨さやその反省に

立った平和への決意は、はるか遠い歴史的なできごとになり、さまざまな貴重な体験が風化しようとしております。このような社会的風潮を背景として、いま、国の内外の情勢は、平和の維持にとってきわめて不安な状況にあるといえましょう。

この意味で、今回、埼玉県地域婦人会連合会の皆さんが、「あの空を忘れない——わたしの戦争体験」を刊行されますことは、時宜を得た企画であり、誠に意義深いものがあります。とりわけ、ここに掲載された記録のかずかずは、いずれも作者の実体験に基づいたものばかりであり、それだけに重い内容をもっており、読者に深い感銘を与えることであります。

ところで、今日、世界は「国際化時代」といわれ、国際社会における、国と国との相互依存関係が著しく深まり、いかなる国も世界の平和と繁栄なくしては、自国の繁栄を実現することができない時代となってきました。そうした中で、私たちは、今こそ平和国家建設への決意を新たなものとしなければなりません。

私は、この書が戦争を体験した世代と戦争を知らない世代をつなぐ大きなかけ橋となり、平和国家建設への決意が大きな輪となって広がりますことを、心から期待いたします。この発刊にお祝いを寄せるものであります。

昭和五十九年五月

あの空を忘れない／目次

発刊にあたって.....	埼玉県地域婦人会連合会会長 大友 よふ.....	3
平和への決意を新たに.....	埼玉県知事 畑 和.....	5

第一部 空襲下の恐怖

繰り返したくない思い出.....	島崎 綾子.....	12
三人の肉親はどこに？.....	安藤 吉枝.....	15
機銃掃射の恐怖.....	柳下 久枝.....	16
この目で見た地獄.....	吉野 福子.....	19
九十九里浜と竹槍.....	小島 うめ.....	21
リヤカーで浅草から浦和へ.....	近藤 康代.....	24
わが家を焼かれ病に倒れて.....	井出けさ代.....	28
爆音と焰の中の青春.....	手塚つや子.....	33
火の粉に追われて.....	小林 雄子.....	37
私の熊谷空襲体験.....	石井 妙子.....	40
体験を通して平和を願う.....	泉沢富美子.....	42
私の空襲体験記.....	福沢 愛子.....	45
おばあさんに助けられたいのち.....	實川 博子.....	48

昭和二十年三月九日―日記より……………清水 卿夫 32

第二部 銃後の生活……………

戦犯の夫は果鴨アリズン―姉に代わって！……………新井あき子 62

銃後の妻―当時の記……………肥留川ナツ 66

押し入れの中で泣く……………一適 愛子 70

その頃の暮らし……………蓮沼 アサ 72

戦時下の食生活……………長島 民枝 75

私の奮戦記……………石井 節子 78

母なる大地に平和を……………岡田 和家 81

戦争という怪物……………上田 好子 85

食糧増産と子育てに……………梅林寺アイ 88

苦しみの日々……………林 範子 91

あの空を生涯忘れない……………守谷 春子 93

小学校の教師として……………米山ゆき子 96

助産婦として生きる……………亀山 シズ 99

戦時下の苦しさ……………塩野 キヨ 102

戦争の悲劇……………市川 民 108

父の出征に泣いた母……………新井 和子 112

怖かった毎日……………	横川 つや	115
農家でも食糧に困った……………	鵜野 くに	117
村の生活……………	神山 キミ	120
小学生の食糧増産……………	岡安ひで子	124
勤労働員……………	柳下キヨ子	126
兄の死……………	長島二三子	127
私の受けた軍国教育……………	武 敏代	130
悲しい学童疎開……………	恩田いつ子	133
乳幼児強制疎開……………	後藤百合子	135
島から逃れて……………	中島 操	138
第三部 引き揚げの中で……………		
貨車の中でのお産……………	若林 寿美	142
置去りにされた子を思う……………	伊賀 忍	144
中国孤児に涙あふれて……………	佐々木いつ	148
外地で迎えた終戦……………	田島千恵子	151
あれが本当の生き地獄……………	鈴木 初子	153
中国における戦争の体験……………	和田 とよ	157
中国から混乱の内地へ……………	清水 ツネ	160

引き揚げの体験……………	市川タカ子	163
朝鮮で終戦を迎えて……………	金井 はな	166
大連からの引き揚げ……………	倉内 愛子	169
平和を祈ります……………	久保 和子	172
平和の中に動乱の母を想う……………	細井喜美江	174

第四部 反戦平和への誓い……………

三度許すまじ原爆を……………	野田 秀子	180
従軍看護婦として……………	三友 きよ	183
新しい出発——外人三題……………	大友 よふ	186
忌まわしい体験をかみしめるとき……………	千葉 英子	192
悪は戦争という馬の背にのって……………	大道寺 房	194
かみしめよう平和を……………	柳下キヨ子	198
焼け死ぬ命が……………	佐野多紀子	200

平和に関するアンケート……………	埼玉県地域婦人会連合会広報委員長	大道寺 房	203
あとがき……………			214

第一部

空襲下の恐怖



鋏を打つ 工場の窓に 梅一輪
春一番 神風ふけと 祈りつつ

坂場きみ

勤労働員の女学生 坂場きみさん（中央）提供

浦和市領家 5—13—3

繰り返したくない思い出

浦和市 島崎 綾子（57歳）

私は終戦の年の昭和二十年には山口県の光海軍工廠で挺身隊員として働いていました。七月も終わりのころは付近への空襲がひどくなり、いよいようちの工廠も危ないと、私のいた事務所は近くの山に疎開しました。

八月も十日過ぎのある日、いつもの事務連絡で工場に行きました。山を下りると、砂地に建っている工場はぎらぎらとした太陽の照り返しで焼けつくような暑さでした。

連絡も終わり、工場の食堂でお昼を食べ始めると空襲警報が鳴りだしました。それまで一度も工場の上空には敵機が来たことはなかったので、まさかと思いながら防空壕に入ったとたん、近くでズーンという腹にこたえる地響き、続いてドーン、バリバリと耳のつぶれるような音、同時に壕の中は真っ暗、爆撃で二つの入り口は、砂と倒れた松の木で塞がれ、二、三十人が押し合うようにして入っている壕の中に生き埋めになってしまいました。泣き叫ぶ人もいましたが、早く入り口を探さなければと、皆で夢中で砂をかきわけていると、松の木の間からかすかな光が見えてきました。

そこから砂だらけの顔を出してみると、何分か前にいた食堂も工場も火の海。流れるように後から後か

ら爆弾の投下、燃え上がったほのおの先からは赤い雪のように火の粉が舞い降りていました。その火を逃れて海に向かって逃げる人達を、いくつもの飛行機が至近距離まで急降下し、ダ、ダ、ダ、ダッと狙い撃ちしてピューと上昇。また人影を見ると追ってくるのです。

近くに見えるつぶれていない壕に合い間を見はからって、がたがたする足で無事飛び込んだのはよいのですが、その壕の二つの入り口にはふたがないのです。爆撃のたびに入り口から入ってくる爆風で、砂は舞い上がり、地に伏せている胸がギューと締めつけられ、同時に壕の外に吹き飛ばされそうになります。それで私達は壕の真ん中で抱き合い、その爆風に抵抗していました。外にはけがをした人のうめき声、逃げまどう人の悲鳴や叫び声が聞こえるのですが、助けてあげるために動くこともできませんでした。

ようやくまわりが静かになりました。恐る恐る外に出た時は夕方近くになっていました。まだ工場は燃えていましたが、もう跡形もありません。至る所爆弾のため大きな穴があき死人がごろごろしていました。その間を、腰の肉がごっそりえぐり取られ骨まで見えている友人が、必死で工場の外に向かって駆けに行きました。片手がぶらぶらになった全身血まみれの人が、放心したような目付きで歩いていました。この中で私が生き残っていることが、なにか不思議に思われてなりませんでした。

それからは空襲もなく、数日間は死体の後かたづけです。寮がいっしょだった友達はトイレの板と板の間で、車にひかれた猫のようにつぶされて死んでいました。機密保持のため出はいりをむずかしくしてあ

った工場の中では逃げることもかなわず、動員された学生達が折り重なって、松の根っこのように黒焦げになっていました。異様なにおいとともに、見るのも無惨なものでした。

五、六日たってから、数日前に戦争は終わったと知らされました。するとあの大空襲は終戦直前だったのです。もう一日か二日早く戦争が終わっていれば、いっしょに働いた人々の命をあんなにたくさん失わずに済んだのにと、くやしい思いをしました。

やっと郷里の高知に帰ってよいことになりました。松山までは船ですが、海の中は機雷だらけ。ああ、あそこに!! 今度はこちらに!! と機雷の浮いているのを船長さんに教えられ、身のちぢまる思いを何度もしました。空襲ではなんとか命拾いをしてやっと父母のもとに帰れるかと思ったら、戦争が終わってからも今度は機雷攻め。海の底をじつとにらみながら松山にたどり着いた時は、本当にほっとして、船長さんに何度も何度もお礼をいいました。

当時のことはこの外にもたくさん生々しく頭の中によみがえってきますが、二度と経験したくないし、他人にもさせてはならない、今でも身ぶるいするようないやな思い出です。

三人の肉親はどこに？

和光市 安藤 吉枝（58歳）

今日支部長から埼玉県婦連発行の新聞をもらって手にしたら「戦時下の体験を語る」原稿募集が目に入り、私はすぐ近くのスーパーに原稿用紙を買いに走りしました。

戦争は二度とやってはならない、決して繰り返してはいけない、と。

昭和二十年三月十日、本所、深川の上空襲で、主人は、両親とたった一人の兄、三人を一瞬のうちに失ったのです。その歎きは本人でないとわからないと思うのです。筆や言葉で言い表わせるものではない、たった一人ぼっちになった主人です。

その当時、中島飛行機会社三等技師だった主人は、二月十一日、工場爆撃で重傷を負って、山の手の病院におりました。深川森下町におりました母が、今日は卵が入手出来たから、明日は落花生が手に入るからと、ほとんど毎日のように病院に姿を見せてくれました。その母が、三月十日を境にぶつり音信が絶えたのです。あの晩赤々と燃える下町を病院の窓から、案じておりましたそうです。

それから数日して伯父や叔母が病院に見舞いにみえて、諦めてくれ、親戚にも連絡はなし、焼け跡に戻った形跡すらない。それから、叔母や伯父は焼け跡を掘り起こして、飯茶わん三個を持ち帰り、これで諦